

椎名麟三「悪魔」論

—「悪魔」、そして「クリスチャン」であることの意味—

金慶湖*

(e-mail : kkhbtfy@hanmail.net)

< 목 차 >

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. はじめに | 4. 「クリスチャン」の男 |
| 2. 「悪魔」は誰なのか | 5. むすびに |
| 3. 「メカケ」の女 | |

キーワード：椎名麟三(Shiina Rinzo), 悪魔(*Devil*), クリスチャン(Christian), イエス・キリスト(Jesus Christ), 復活(Resurrection), 絶対(Absolute), 相対(Relativity), 二重性(Duality)

1. はじめに

「悪魔」は、昭和三十一年五月、「文芸春秋」に発表された。当時の文芸時評は悪評一色で、椎名もこのことに触れ、「もちろん私のこの小説が、「悪作」なので、私のアイロニーが通じなかったのかも知れないが、ちょっと情けない気もした」¹⁾と残念な気持ちを漏らしている。

斎藤末弘は、『椎名麟三全集』でこの小説の「解題」²⁾として、短いながらも作者の意図を的確に提示してくれており、これによって、作者の意図をまるで顧みないような誤読はある程度は免れた感がある。とはいえ、この短編が十分に論じられたと言っているわけではない。それどころか、この短編に対する論者たちの関心は非常に低いもので、これといった

* 九州大学大学院 地球社会統合科学府 博士課程

1) 椎名麟三(1956)「あとがき」『人生の背後に』、角川書店(ただし引用は、椎名麟三(1978)『全集』23、冬樹社、p.365)

2) 斎藤末弘(1971)「解題」椎名麟三(1971)『全集』7、冬樹社、pp.574-575

次のようにと書いてある。「「過ぎる」ことが「悪魔のようなもの」なのである。(略)二者択一の論理、どちらかを抹殺しなければならない考え方の中に、(略)ニヒリズムの相がある。」

先行研究は実際ほとんどないと言って過言ではないほどである。

ところで、この作品から十年ほど歳月の経った昭和四十年ごろに際して、椎名は、かつて彼にキリスト教の洗礼を受けた（昭和二十五年）赤岩栄牧師と、聖書解釈をめぐる見解を異にし、反目し、結局絶縁するに至る。それに伴って椎名の書き残した批判的評論や風刺小説などを読み解くと、十年前の、この「悪魔」まで遡及されるものがあるのだから、この昭和三十一年の短編を論究することは、昭和四十年代の、赤岩牧師との不和から生まれた作品群を理解しようとする際、一つ前の段取りとしても十分な意義があると思われるのである。

論の展開としては、当時「あいまい」とされた作品のテーマを明確にすることを主な狙いとし、そのために、当時の時評を検討し、その後、登場人物の二人、「女」と「男」を分析する手順で進みたいと考える。

2. 「悪魔」は誰なのか

この短篇について、福永武彦は、登場人物たちの中にある溝の正体が「どうもさっぱりしない」とし、山本健吉は「最後のところが描き切っていないと思われた。（略）腰ぐだけに終っている」と不満を述べ、そして、平野謙は「凡作以下の悪作である」と酷評している。

まず、平野謙が「凡作以下の悪作」と毒づくのも頷けるのが、この短編の題目がとにかく唐突だったということが挙げられよう。つまり蓋を開けて見てがっかりしたというわけだ。結論的に、この小説に「悪魔」は登場しないのである。というのは、我々が考える類の、エデンにおいて甘い言葉でエバをたぶらかしたり、荒野においてイエスをそそのかしたりする、言ってしまうと「サタン」は出て来ないのである。とすると、この作品の「悪魔」とは一体何を指すのかと言うことになるのだが、それは、登場する二人の人物のなか、メカケ格の女のほうが、もう一方の男を見て、「悪魔だという気がした」というわけなのである。こう見ると、平野が「それを大仰な「悪魔」というようないいまわしで、正直な読者をまどわかねないあいまいな小説に仕立てることは、もうやめてもらいたい」と、平野自身書いているように、ほぼ「八ツ当たりのにはらをたてている」のも尤もである。だがしかし、平野の「失望落胆」に同調できなくもないとしても、彼の読みには一つの過ちがあるように思われる。

純粹に利己的な男性であるために、かえってムクな男にもみえかねない対女性関係を、椎名はしばしば描いてきたが、こんどはそういう男性を女の側から「悪魔」として描いてみせたにすぎない。神のごとく無邪気な男のエゴイズムも、女性の視点からは「悪魔」にひとしいものとみえるという一編の主題は、常識をちょっとひねった変哲もないものだ。3)

と平野は書いているが、小説の表面的な関係のみが、文字通りにあまりにも素直に読まれ、そこに隠されている「ちょっとひねった変哲」を見逃している気がしてならない。この小説の「悪魔」とは「男のエゴイズム」なのだという理解で、果たしていいのだろうか。

また、山本健吉の感じ取った、「腰くだけに終わっている」という印象もなお、同じ過ちを犯しているのではないかと思うのである。

「悪魔」という言葉が、とうとつに出てくるが、この男の善良そうな顔の後ろに悪魔を見るという考えが、十分に展開されていない… (略) 4)

それが何であれ、この小説に託された「考え」というものが、「十分に展開されていない」という点においては、判断を留保しておくが、ただここで一つ言えるのは、この小説の「考え」というのが、「男の善良そうな顔の後ろに悪魔を見る」という性格のものではないだろうということである。

福永武彦はどうか。彼によると、登場人物のなかの「男」が、

善良なのかそうでないのか、(略) そういうところが曖昧で、その曖昧さの故に如何にもありふれた市井の一人物という気はするが、悪魔という形而上学的主題の前には、男の姿が、影が薄い。従って… (略) 5)

従って、人物たちの間に置かれている溝の正体が「どうもさっぱりしない」というのである。ここでも「男」は「悪魔」として理解されており、何の「ちょっとひねった変哲もない」読書となっている。

どちらかと言えば、この小説の「悪魔」は「男」のほうではなく、「女」であると思われるのだが、それについて考えてみたい。

3) 平野謙(1956.4.21)「今月の小説ベスト3」『毎日新聞』

4) 山本健吉(1956.4.24)「文芸時評」『朝日新聞』

5) 福永武彦(1956.6)「私の「今月の問題作五選」」『文学界』

3. 「メカケ」の女

この小説の主人公の笹川徳子は、幼くして親を亡くし、親戚の間を転々として「厄介者」として育った。彼女は、少女時代から自分を「ほんとう」に愛してくれる人を求めている。しかし、彼女が女学校を卒業するころから現れた男たちはみんな口では「ほんとう」に愛していると言いながらも、彼女を弄ぶだけで、二十三歳には初老の株屋の妾になっていた。そのころ、彼女の喫茶店に時々やって来る工員風の男があった。名は桜井久雄という男で、どこか卑屈そうで、彼女のいうことなら何でも聞きそうな、だから「ほんとう」に愛してくれそうな男のように思われたのである。徳子は、久雄のためには何でもしてやりたいという気になり、持っていた店を売って、そのお金で株屋との関係をきっぱりと清算した。そして安いアパートの一室へ移り、今度は久雄の「メカケ」となったのである。

だが、意外なことが起こった。妻子のせいなのか、彼が彼女との関係に悩みはじめ、「教会なんかへ行きはじめ」、一昨年にはこっそり「洗礼を受けるようなことさしでかしていたのだ」。そんな久雄は、家や金のことで徳子に追及されると事ごとく嘘をつき、しかも女好きでときどき若い女と映画へ行ったりしているらしく、それを詰問すると、しらじらしくも嘘をつき、真っ向から否定する。おかげで徳子は、とうとう寝込んでしまった。彼女にはこの男が「一体何のために教会へ行き、何のために洗礼なんかを受けてクリスチャンになったのやら」、さっぱりわけが分からなかったのである。徳子は、「偽善者をやっつけてやろう」と決心し、久雄を怒鳴り付け、病気も忘れて「死物ぐるい」であちこち散々回った。が、虚しくもどこにも「女」の証拠はなく、ついに彼を教会へ向かわせた。そして牧師に二人の関係を暴露した。牧師は眠そうにそれを聞き、疎ましそうにこう言ったのである。「あなたたちは別れなさい。とにかくそんな関係は罪ですからね」。彼女は自分が「ほんとう」の愛を求めて来たのが「罪」と非難されたように思われ、絶望せずにはおられなかった。その翌日の夕方、「身体大丈夫ですか、昨夜あんなに動きまわって」という久雄のいかにも善良そうな顔を見て、徳子は、「全くの悪魔」だと思う。「そして徳子は、いま、その悪魔のために殺されるのだと、悲壮な気持で自殺を考えている真最中なのである。」⁶⁾と小説は終わる。

徳子にとって、この男、つまり、妾を持ちながらも、クリスチャンなんかを気取って、飄々と女を騙し、「ほんとうに愛しているんだよ」と平気で語って来る偽善者、桜井久雄こそ「悪魔」にほかならない。彼女は思い浮かんで来る久雄の顔を「悪魔の仮面」のように感じ、

6) 椎名麟三(1956.5)「悪魔」『文芸春秋』(ただし引用は、椎名麟三(1971)『全集』7、冬樹社、p.65)

涙とともに思わず「ひとを不幸にして！」と叫ぶ。しかし、ここで考えなければならないのは、彼女の「不幸」というのは、この桜井久雄という男がもたらしたものなのかどうかということである。彼女を「不幸」にしたのは、誰よりも彼女自身ではないのか、ということだ。だとすれば、彼女のどこがいけなかったのか。何故、自らを「不幸」に陥らせるしかなかったのだろうか。それは、彼女があまりにも「ほんとう」の愛を願望したせいであろう。何故、「ほんとう」の愛を求めることで人が「不幸」にならなければならないのか。作者はこの作で何が言いたかったのだろうか。

この小説の翌年に椎名は「悪魔の製造」という随筆を発表している。次のように始まる。

悪魔というものには、まだ私はお目にかかったことがない。だから悪魔というやつは、いったい、ひげを生やしているのか、二本足で歩いているのか、四本足で歩いているのか、もし口というものがあるなら、どんな言葉でしゃべっているのか、何を食べているのか私にはさっぱりわからない。7)

ところで、このエッセーは、小説「悪魔」の時と同じく、これ以上「サタン」の話ではなくなる。その代わりに、「健康になりたい」という人間の「欲望」から、「悪魔」を「製造」してみることにするのだ。内容を掻い摘んでみると、病気の人とは当然ながら「健康になりたい」と望む。だが、「健康」というのは「人間の諸目的を実現するため」の条件の一つに過ぎないはずである。なのに、いつの間にか「健康」が生きる「目的」そのもののように変わり、皮肉にも「病気であるということに生きがい」さえ感じてしまう。あらゆる薬をやたらと飲み、私は病気だと強く信じ続ける。その病気というのも実際のところ治っているかも知れないのに、医者は何と言われようが、病気なはずだと信じたままである。という話である。そして、椎名はこう言うのだ。

この信じすぎているということによって、悪魔化は完成するのである。このとき信じすぎるといことは、こだわりすぎることでもある。病気のかわりに、宗教とおきかえられても科学とおきかえられても、また政治とおきかえられても芸術とおきかえられてもいい。信じてもいいが、信じすぎることが、ひとを悪魔とするのである。8)

7) 椎名麟三(1958.9)「悪魔の製造」雑誌「指」(ただし引用は、椎名麟三(1974)『全集』16、冬樹社、p.494)

8) 前掲注7)、p.498

つまり、小説「悪魔」の「悪魔」は、久雄ではなく、徳子のもつ「ほんとう」の愛を「信じすぎる」ということ、言い換えれば、「こだわりすぎる」ということを指すと言えよう。そのため、「ほんとう」の愛という、得体の知れないものへのこだわりが生きる「目的」になり、それが自分より二十七歳も多かろうが、妻子があろうが、妾になることも辞さないし、そうしているうちに、自分が「ほんとう」に愛されているのか、「不幸」になりつつあるのか、わけも分からず、分別もつかず、最終的には「そんな関係は罪」だと非難され、絶望してしまったのである。彼女を「不幸」にした「悪魔」は、インチキなクリスチャンの、嘘つきの「男」だったわけではなく、「女」自身だったのであろう。つまり、徳子の「信じすぎる」ということが、ひとを悪魔」にしてしまったのである。

そして、徳子の内面に深く根ざしてしまっている「信じすぎる」という「悪魔」は、別のところへ移り始める。「ほんとう」の愛を求めることがままたらなくなるにつれ、久雄のことを「悪魔ではないか」という気がしたのち、「やはり（略）悪魔なのだ」と断定するようになり、最後のところでは「全くの悪魔だ」と確信するに至る。そして例の最後の文章である。「そして徳子は、いま、その悪魔のために殺されるのだと、悲壮な気持で自殺を考えている真最中なのである。」

椎名がこの作で主張したかったのは、「この信じすぎているということによって、悪魔化は完成する」というテーゼ、つまり、「信じすぎる」ことの帯びる「悪魔」性についてであったと言えよう。

4. 「クリスチャン」の男

ならば、すでに「完成」をみた「悪魔」をまとっている徳子には、とうてい救い出しようがないのであろうか。もちろん、答えは否であらう。その鍵は、「悪魔」だという疑いはあれど、やはり桜井久雄にあるはずだ。

この男は、徳子がこの男の為にとあって、自らの経済的基盤を放り出してしまうと、突然、「教会」に行きだし、「洗礼」を受け、「クリスチャン」となった。徳子のみならず、読者にとっても、何の前触れもなく、あまりにも突拍子もない行動に出たわけで、違和感を感じなくもないが、兎にも角にも、彼は「クリスチャン」となった。この不自然な展開は、椎名の小説が「観念小説」であるから仕方がないということでは済まされない、いや、むしろそれだからこそ、何かの重大な意味を持っているのではないかというふうに思われるのである。

何故ヒーローはヒロインのためにとでも言うかのようなタイミングで、「クリスチャン」になったのか。「クリスチャン」になったのだから、言うまでもなく、キリスト教と関係があるはずである。それなら、彼女にまわり付いている「悪魔」を「やっつけて」くれる存在は、三位一体説で言う、父なる「神」なのか、子なる「イエス・キリスト」なのか、それとも「聖霊」なのか、それでもなければ「聖母マリヤ」なのか。性急な判断を恐れず、極通俗的な除去法としては、一先ず、聖母ではないだろうということは言えるかもしれない。なぜなら、作者は、キリスト教のなかで、カトリックではなくて、プロテスタントに属しているからである。

ここに、「悪魔」の何年か前に書かれた「善魔」（「指」昭和二十八年十一月号）という随筆がある。「悪魔」の諸問題に接近するために、この紛らわしい題名のエッセーについて触れておく必要がある。要は、なぜ久雄が「クリスチャン」でなければならぬのか、また徳子の「悪魔」を「やっつけて」くれる存在は一体何なのかという、二つの質問への答えを、このエッセーが持っているのである。次のように始まる。

悪魔というやつは、人間どもには人気者である。神の名を口にしたことのない者でも、悪魔の名を口にする者が多い。（略）さてしかし、僕は、悪魔がほんとうは、どんな顔をし、どんな恰好をして居り、何語で話をするのか、さっぱり知らない。9)

上で見て来た、五年後の文章「悪魔の製造」と酷似している冒頭ののち、椎名はここで、どうもドストエフスキー「地下生活者の手記」（「エポーハ」一八六四年）の主人公を思わせる一人の男を「僕たち」の世界に連れ出して来る。この男は、歯痛に呻り続けながらも、病院にも行かず、「マゾヒストのように、苦痛のなかにいい知れぬ悦楽を見出している」らしい。それで「僕たち」は、この「いやらしい男」を告発し、公判廷に立たせることにした。僕たちは検事になり、彼を「悪魔」として「断罪」する。弁護人はその男の無罪を弁論するが、僕らは笑った。弁護人は「あなたたちもまた、この歯痛の男と同じであるのだ」と言うも、僕たちはまた笑うのみ。そして裁判長席を見た。そこには、一匹の小猿が座っていた。「やがて判決がくだった。裁判長は、キ、キ、キ、といったのである」。この寓話の結論へ向かう前に、一つは確かになったのかも知れない。徳子を救い出してくれるのは、すでに「神」ではないだろうということだ。なぜなら、椎名の作り出した「僕たち」の世界では、「神」は、無礼千万、「キ、キ、キ」と言う存在になっているではないか。やが

9) 椎名麟三(1953.11)「善魔」雑誌「指」(ただし引用は、椎名麟三(1973)『全集』14、冬樹社、p.399)

て、椎名は釘を刺す。

勿論、これは幻想だ。だが、悪魔を糾弾し、悪魔とたたかう者は、神ではなくて、善魔とでもいうべき存在である気がするのである。さらにいうならば、僕たちが、もし悪魔であるならば、同時に善魔でもあるということだ。そしてここで注意しなければならないのは、善魔も悪魔と同じ次元に属し、その価値において厳密に等しいということである。どちらがよりすぐれているということはないのだ。10)

このところで「注意」しなければならないのは、徳子が「悪魔」であるから、久雄が「善魔」に当たるのであろう、という誤解の罠に陥らないことである。徳子のみが「悪魔」でもあり、「善魔」でもあるということだ。つまり、「善」と「悪」を問わずに、どちらかの端に向かって突っ走ると、言い換えて、何か一方だけを「信じすぎる」と、もはや人間でなくなり、「魔」に化すということである。それを警戒しなければならないと言っているのである。

それでは徳子はどうやって救われるのであろうか。作者は、次のようにこのエッセーを閉じている。

そしてこの二者を、きちんといつも争もない等価値におき得るものは、キリストの復活に自己の根拠をおき得るものだけである、ということはいうまでもない。11)

ここにある、「キリストの復活に自己の根拠をおき得るもの」というところも甚だ難題ではあるが、ひっくるめて「クリスチャン」としよう。目の前の、徳子を如何にして救えるのか、久雄は何故クリスチャンになったのかという問題を先に解決するためである。この「クリスチャン」のみ、善だの悪だのという「二者を、きちんといつも争もない等価値におき得る」武装ができるのだと作者は言っているのである。

この武装により、善か悪か、ある一方に傾いてしまうことなく、徳子のように「魔」と化すことなく、彼女の帯びる「魔」性と立ち向かうことができるのである。あい反する両方を「等価値」として置くことが出来なければ、つまり、「クリスチャン」としての武装が出来ていなければ、徳子の「魔」と戦うすべもなく、彼女同然、ある一方の「魔」のほうに突き進む

10) 前掲注9)、p.403

11) 前掲注9)、pp.403-404

ばかりであろう。「等価値」といった、この「クリスチャン」としての武装を備えてからこそ、極端に走り切って、いまや奈落の底へ落ちんばかりの徳子を、元のあるべき場所へ連れ戻すことも出来るし、言い換えて、救い出すことも、始めて可能になるのであろう。久雄が「クリスチャン」となった所以もここにある。

残されていた難題、椎名の説く「クリスチャン」とは、即ち、元の文章に戻して、「キリストの復活に自己の根拠をおき得るもの」とは、如何なることであろうか。これを知るためには、椎名のキリスト理解の特徴を掴んでおく必要がある。椎名にとっては、キリスト教義の核心とされる「原罪」「代贖」「三位一体」「審判」などには、さらさら興味がない。「神」に対してさえも。前に引用したように、「神」が「キ、キ、キ」と言っているくらいである。彼の心を引きつけているのは、たった一つ、イエス・キリストの「復活」に対してのみである。そうしたイエスの「復活」を、椎名はどのようなものとして把握しているのであろうか。彼の説く「復活」の性格が端的に表れている文章がある。次がそれである。

同時に死んでいて生きているイエスの二重性は、私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちに、打ちくだいてしまったのである。

なぜならそのイエスは(略)十字架にかかれ、二日半も葬られていた(略)死んでいるイエスである。しかし「ほんとうに」死んでいるイエスかというと、生きておられるイエスなのである。(略)私たちの考える二つの絶対、生の絶対性と死の時間の絶対性(略)を超えて存在しておられるのである。私たちの絶対的な必然性と考えている壁がここではくずれ落ちている。しかしそれこそ「ほんとうの自由」というものではないか。12)

椎名の説くイエスの「復活」とは、一度は「死」んだが、今は蘇って「生」きて「天」に上げられ、神の右にすわられた¹³⁾場面の問題ではない。「同時に死んでいて生きている」という「二重性」を帯びたものでなければならない。つまり、「死」であると同時に、「生」でもある。「人間」であり「神」である。「時間」であり「無時間」(永遠)でもあるのだ。

椎名の世界においては、彼のこのような理解により、ある一方で「絶対的」であったもの

12) 椎名麟三(1966.4)「「復活」と私」雑誌「信徒の友」(ただし引用は、椎名麟三(1977)『全集』20、冬樹社、p.260)

13) 日本聖書協会(1961)「マルコによる福音書」第16章19節、『聖書』、三省堂、(新約)p.135

は、もう一方と相殺するか対峙するかで、もはや「絶対」ではなくなる。つまり、「生」か「死」か、どちらか一つの＜絶対＞ではなく、「生」と「死」の両方がキリストにより「等価値」とされ、＜相対＞的なものになる。唯一無二だった「絶対的」な猛威は無力化するのである。これが、「クリスチャン」、つまり「キリストの復活に自己の根拠をおき得るもの」としての、「魔」と戦うための武装である。前にも書いたように、これが、久雄が徳子の「悪魔」と戦うために、洗礼を受け、「クリスチャン」となった所以である。

5. むすびに

本稿では、椎名麟三「悪魔」を論じた。先ず、この作品のテーマは、発表当時理解されたように、「悪魔」というのは「男のエゴイズム」などではなく、「信じすぎる」ことが帯びる「魔」性のことだということを確認した。そして、そのような「魔」性と戦わせるために、作者はこの作品において何を仕向けておいたのか、それはどのような仕組みとして働くのかを論じた。その仕向けられたものとは、久雄に「クリスチャン」という思想的武装をさせることであり、それにより、「魔」、即ち、「絶対的」な猛威を振るう何物に対しても、「二重性」という特殊な機制として戦い、それらの猛威を無力化させることを図るのである。そして、その「二重性」は、「死」と「生」という、二項対立し、決して相容れないもの同士が、イエス・キリストの「復活」により、同時に同じ次元でおさまり、並立できるようになったとする信念（もしくは信仰）、即ち「自己の根拠をおき得る」ことにより成り立つ。

しかし、ここに一つの問題がある。椎名はこのような仕組みを呈し、理屈は整った、受け入れたまえとでも言わんばかりであるが、小説のなかの葛藤は依然として何一つ解決していない。久雄が一人でいくら立派に精神的な武装を備えても、それが徳子にとって何になるというのであろうか。椎名から借りると、それは彼女と関係のない「窓の外の風に過ぎない」14)。

あの「死」さえ＜絶対＞的なものではないことがキリストによって証明されたものだから、何にせよ、全てが、キリストの前では所詮＜相対＞的なものに過ぎないし、そんなものを「ほんとう」として「絶対的」に「信じすぎる」ことは止しなさい、ということを経済にも受け

14) 椎名麟三(1948.3)「戦後文学の意味」雑誌「人間」(ただし引用は、椎名麟三(1973)『全集』14、冬樹社、p.27)

入れてもらおうとするのであれば、「死」と「生」から精製された、このキリストの「二重性」といった弁証法的なカラクリを彼女に突き出すより、むしろ潔く、聖書の一句でも言い聞かせたほうがいっそ有効かも知れない。「愛は、神から出たものなのである。(略)神は愛である。(略)わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、御子をおつかわしになった」¹⁵⁾と。何しろ、「ほんとう」の愛を求める彼女であるからである。

実は、この「絶対的」なものとの戦いというテーマは、この短編のちょうど一年前の長編小説、「美しい女」(「中央公論」昭和三十年五月～九月)ですでにたっぷり使われており、それでもう一度同じテーマのものを書きなおしてみたくなったというところには、いろいろな理由があるなかでも、「美しい女」で抑えていた衝動、つまり、主人公を「クリスチャン」として仕立ててみたいという気持ちが大きくあったと思われる。

しかし、この、キリスト(や聖母)の象徴であろう「美しい女」の造形について、高堂要は「いったい椎名麟三の体験している「キリストにある自由」というような「形而上的な世界」を、それと無縁の人々にとって全く不可解な信仰の出来事を、どのようなイメージで表現することができるというのであろう」¹⁶⁾と述べているように、主人公を「クリスチャン」にしても、「悪魔」における徳子にも「キリストにある自由」というのが「不可解」であるばかりで、一向に伝わっていない。「美しい女」の時と同じ問題がそのまま残されているのである。

もう一つ、これもまた、宗教的な性格の批判ではなくて、単なるロジックの話であるが、椎名の世界では、父なる神は蔑ろにされつつも、子なるイエス・キリストの「復活」のビジョンだけは生かされてゆくという、そもそも神がないところにキリストの「復活」があり得るかという自家撞着に陥っていて、「秩序順序を踏まえていない」「いわばのっぺらぼう」¹⁷⁾のキリスト理解という批判に常にさらされているのだが、つまり、文学的な展開においても、宗教的な理論においても完結していないのである。

今後の課題として、椎名が、このような盲点をどのように克服していき、特に「はじめに」のところに書いたように、それがこの作から十年後の作品群でどのように結実するのかについて考えてみたい。

15) 日本聖書協会(1961)「ヨハネの第一の手紙」第4章7節-10節、『聖書』、三省堂、(新約)p.380

16) 高堂要(1989)『椎名麟三論』、新教出版社、p.147

17) 富吉健周(2006)「椎名麟三の復活信仰の成立—『聖書』と椎名麟三—」椎名麟三研究会編『論集椎名麟三』、おうふう、p.125

* 付記

本稿は、韓国日本研究總聯合会第6回国際學術大会（2017年4月15日、於全北大学）においての口頭発表を基に執筆したものである。会場でご意見をくださった方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

【参考文献】

- 椎名麟三(1971)『全集』7、冬樹社、p.65,pp.574-575
_____ (1973)『全集』14、冬樹社、p.27,p.399,pp.403-404
_____ (1974)『全集』16、冬樹社、p.494,p.498
_____ (1977)『全集』20、冬樹社、p.260
_____ (1978)『全集』23、冬樹社、p.365
高堂要(1989)『椎名麟三論』、新教出版社、p.147
日本聖書協会(1961)「マルコによる福音書」第16章19節、『聖書』、三省堂、(新約)p.135
_____ (1961)「ヨハネの第一の手紙」第4章7節-10節、同上、(新約)p.380
富吉健周(2006)「椎名麟三の復活信仰の成立—『聖書』と椎名麟三—」椎名麟三研究会編『論集
椎名麟三』、おうふう、p.125
平野謙(1956.4.21)「今月の小説ベスト3」『毎日新聞』
福永武彦(1956.6)「私の「今月の問題作五選」」『文学界』
山本健吉(1956.4.24)「文芸時評」『朝日新聞』

논문 투고 일자 : 2017. 07. 20.
논문 심사 일자 : 2017. 08. 02.
게재 확정 일자 : 2017. 08. 04.

< 要旨 >

椎名麟三「悪魔」論
— 「クリスチャン」であることの意味 —

金慶湖

本稿では、椎名麟三「悪魔」を論じた。まず、この作品のテーマは、発表当時理解されたように、「悪魔」というのは「男のエゴイズム」を指すものではなく、「信じすぎる」ことが帯びる「魔」性のことだということを確認した。そして、そのような「魔」性と戦わせるために、作者はこの作品において何を仕向けておいたのか、それはどのような仕組みとして働くのかを論じた。その仕向けられたものとは、主人公に「クリスチャン」という思想的武装をさせることであった。それにより、「二重性」という特殊な機制として戦い、「魔」、即ち、「絶対」とされるものを「相対」化し、それらの猛威を無力化させることが出来るのである。そして、その「二重性」は、「死」でもあり、「生」でもあるイエス・キリストの「復活」のビジョンに自分を託すこと、言い換えれば、「キリストの復活に自己の根拠をおき得る」ということにより成り立つ。この作品は、何かを「絶対的」に信奉することへの警戒であると共に、椎名特有のキリスト理解、つまり「二重性」としてのキリストの福音を伝えているのである。

A Study of Shiina Rinzo's *Devil* :
The Meaning of Being a Devil and a Christian

Kim, Kyoung-Ho

In this paper, I discussed Shiina Rinzo's *Devil*. The theme of this work, as it was understood at the time of its release, "Devil" does not refer to "the egoism of man" as it has been suggested, but rather the "evil nature" of "believing too much." As I discussed, the author reveals in his work what is necessary to fight said "evil nature" and how it works. Necessity is here understood as idealistically arming the hero as Christian, and thus allowing him to fight "evil nature" through the mechanism of "duality." This "duality" is supported by the "death" and "birth" of the "resurrection" of Jesus Christ. In other words, it involved the situating of personal faith with the resurrection of Jesus Christ. This work is a warning on believing something "absolutely," and it conveys the gospel of "duality" according to Shiina's unique understanding of Christ.